

第八章 安城校区

第一節 安城校区の概要

安城校区は、種子島の北東部、東海岸に面しており、西之表市街地の南東部約一三・五キロ離れたなだらかな台地上に位置している。北は現和校区、西は古田校区、南は立山校区と境を接し、東側は一望千里の太平洋に臨み、平山・平園・上之町・下之町・川脇・大野の六集落から成り立っている。

地理的には第一段丘に属する地域であるが、起伏が激しく、集落は台地上あるいは山あい¹に点在している。気候は温暖多雨で冬季にもほとんど霜が見られず、恵まれた気象条件の中で園



図8-19 安城校区の位置

芸作物・畜産を中心に、米・サツマイモ（安納芋）・さとうきびなどの栽培が行われている。

近年、過疎化現象が急速に進み、中でも若い青壮年層の流出が多く、児童数の減少とともに高齢化が進んでいる。令和五年（二〇二三）十一月末現在の人口は、男性一四二人・女性一三一人の計二七三人、世帯数は一六〇戸である。

一方、空港拡張に伴う道路拡張整備が進み、昔に比べ市街地への交通も格段に便利になってきている。地域では、校区ゲートボール大会をはじめ諸事業を企画して校区の活性化を図っており、校区を挙げて楽しい郷土づくりに取り組んでいる。

また、郷土の歴史や文化遺産にも恵まれ、郷土芸能の継承（なぎなた踊や棒踊）にも学校と地域が一体となって取り組んでいる。地域住民は、米国船「カシミア号」遭難の際の乗組員救助に当たった祖先の美徳を受け継ぎ、素朴で人情味豊かである。



安城小学校から見た下之町集落

第二節 安城校区の成り立ち

『昔の安城村』によると、安城村の始まりは立山であるとされ、「古は永仁年間（一二九三～一二九九）、帝は九拾一代伏見帝の頃、初めて山を開き人家立つ。今を去る事六百十三年なり。人家初めは立山町に立つ。故に今に立山と記名有る所なり。始めは戸数僅かにして五、六戸に過ぎず居住致せしも、其氏は長野、鮫島、小川、岩坪等なり。」と記載されている。

その後、明応二年（一四九三）二月、第一二代忠時公の命により「羽生右京」が安城村領主（地頭）に補任され立山に移住、後に大野を経由して安城下之町に居を移し、安城を支配する。

『種子島方角札帳』によると、「村域は東西一里一町・南北二里十一町三十間、西之表札の辻から三里三町余。人家百十九軒、うち飯屋元九十軒・川脇六軒・大野十五軒・立山八軒」であった。『懐中島記』によれば、元禄二年（一六八九）の村高は二〇七石、人数一八七人である。

『種子島研究』一二一・一二三号合併号によると、明治十五年（一八八二）安城より古田が分離、古田村となる。

明治十九年度、甌島より平山と大野に合わせて三八戸の移住があり、平山集落が誕生。その後、昭和二十一年（一九四六）に平山集落から二四戸が移住、平園集落ができる。

昭和十四年、安城より立山が分離、現在に至っている。

第三節 地名・字名

一字名

牧野・牧口・東比良・土橋・番屋・二俣野・野木頭・轟・後川・上長谷・坂ノ上・猪崎野・矢太郎・野別府・下ノ平・内牧・鍋川・山ノ茶園・田代・大久保・森之下・後通・森之園・上ノ園・中野・小田・小鬼ヶ野・通利山・黒頭・中目・古殿・宮園・本川・浜坐敷・飯屋園・船高・峰ノ園・高崎・大門・菅ノ子・鳥之峰・丸野・赤牟田・唐竹山・赤坂・下寺山・上寺山・下鬼ヶ野・小渡瀬・比良田ノ上・北笹ノ方・南笹方・河内・井出下・比良田・次郎田・山田・小前田・坂ノ下・浜本峰・浜本・堀切・一ツ町・折坂・瀬切・久保田・松平・日ノ丸・梶町・下田・上下田・溝洗・川口・従上・秋太郎・大田・三ツ町・桑之木・寺口・山神田・森町・小原・上ノ開・丸賀野・大田尾・伊原・塩屋・菅牟田・三本松・安川・日守・手引渡瀬・土戸・大山・長谷・鍬ノ刃・西前ノ平・大野原・大野後平・長迫・アブソコ・二石・敬字ノ平・大野・中峰・東前平・大川田・三本五葉・中割・七秋・山ノ小嵐・木床・岩下・殿増平・長山・鳥巢・下片氏・上片氏・伊手ノ平・南川内・北川内・川大瀬・犬城久保・鳥屋田代・白野・無礼・登掛・大林・田代嵐・通峰尾・大崩・赤毛ノ角・橋ノ峰・上橋ノ峰・駄追込・大園ノ平・枝折・北川・高山崎



安城海岸

二地名

安城

諸説あるが、代表的なものとして、以下三つの説がある。

①「アン、シヨウ」全て露岩の地の義である（『鹿児島懸地名考』）。

② 禰寝戦争の時、島主恵時公が岩屋に一時身を隠して助かったことから、「安らかな城」の意（『西之表市の伝説』）。

③ 島主幡時公が、岩屋に隠れて難を逃れたことに由来（『昔の安城村』）。

とも言われている。

平園

平山地域から開拓により自立したので、平山の「平」と開拓当時の開拓事務所長が宮園氏でお世話になったことや平山地域には宮園という姓が多かったことから、その「園」の文字をもらい平和な園という意味で平園という名がついたという。

宮園

現在「宮園」と呼ばれる地は、明治初年（一八六八）までは「寺園」と呼ばれていた。それは、この地に「妙泰寺」という寺があったからである。宮園と称されるようになったのは、明治初年の廃仏毀釈で妙泰寺が取り壊され、その跡地に諏訪神社が建立され、後に現在地（下之町鳥之峰）に遷座されるまでこの地にあったからであろう。

平山

川（川脇川）の脇にある集落の意。

川脇

甌島からこの地に移住してきた人々が、平らな山だということだけで付けたという。また、一説には、平山牧があった場所に移住によって集落が形成されたので、そのまま集落の呼称になった

塩屋

川脇にある小字名。昔この地で製塩が行われていたことによる。詳しくは、本章第四節四「牧について」の項を参照されたい。

第四節 歴史的特殊性

一 地頭羽生右京能房

文安二年（一四四五）乙丑生く永正十年（一五二三）癸酉七月十二日没（行年六九歳）法号（隆光居士）妻の死の一三年後に没、遺骸は宅地の西山中に葬る。この地を安城御山又は地主山という。

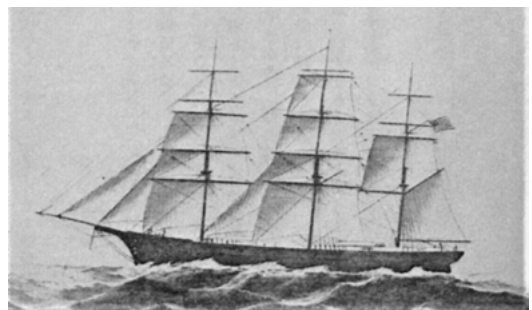
右京能房は、第一二代島主種子島忠時の命により、屋久島から種子島安城の地頭に補任され、明応二年（一四九三）癸丑春、初めは立山に居住したが、やがて島主のいる赤尾木により近く、交通の便が良い安城下之町（現在の安城小学校付近、又は仮屋園）に居を移す。昔の安城村は、安城・立山はもちろんのこと、浜津脇・牧川・草之木・上之城・坂本を支配し（周囲一二里余り）、種子島では、赤尾木、野間に次ぐ三番目の大村だった。右京は、領主としての徳に優れ、安城の地を開拓し、善政を敷き、その人徳が庶民に及ぶことが多かったと伝えられている。中でも、増田（中種子町）や現和との境界問題では右京の望みどおりに決したという言い伝えがある。また、武者修行をして諸国をまわり、武芸事にも長じていたと言われている。

右京が里人にいかに尊敬され慕われていたかは、没後三七〇年の明治十六年（一八八三）に岡山神社が建立され、ほかの三霊とともに祀られていることからわかる。

二 カシミア（ヤ）号事件について

事件のあらまし

明治十八年九月十二日、石油を満載した米国商船カシミア号は、種子島南東三〇キロメートルの海上で猛烈な暴風雨に遭遇し、破船。その時、乗組員一五人のうち、船長をはじめ三人は波にさらわれ死亡。残る一二人は漂流した。七人は



建造当時のカシミア号
（南日本新聞開発センター『太平洋にける橋』）

ボートで十五日に立山舞床海岸へ、残り五人はいかだで二十日に伊関流合の海岸に漂着した。両村民の手厚い救助・介抱により乗組員一二人は無事帰国。両村民の人道的行為に感動した米国政府から、明治二十二年三月、大統領名で救助した二人にそれぞれ金メダルと二五ドルが、明治二十三年一月十五日、両村に五〇〇ドルが贈られた。

贈られた品のその後

安城立山の岩坪平左衛門への金メダルは、息子の代に借金返済のために売られようとしていたのを地区が肩代わりしている。現在種子島開発総合センターで保管されている。なお、伊関の



紀徳碑

古田貞吉への金メダルは盗難にあい、行方知れずである。同伊関の鎌田平兵衛へのお礼としての水差しは種子島開発総合センターで保管され、ピストルは行方不明である。戦時中、供出されたとも伝えられている。

贈られた金五〇〇〇ドルの使途

使途については、県・国・アメリカのそれぞれの考えがあり、様々な方法が提案された。時の外務大臣である大隈重信の鶴の一声「部外者に分配したり勸業資金に回すなどもつてのほか、全部を両村の共有教育費に充て（以下略）」により金額の全部

を両村の教育費に充てることに決定した。そこで、両村は五〇〇〇ドルを折半し、それぞれ日本円にして三三〇七円七六銭四厘を受領した。両村はその使途を次の二つとした。

一つ目は、整理公債（三一〇〇円）を購入し、その利子で教師の質や処遇の改善向上、教育環境の整備・充実を図った。

二つ目は、両村それぞれ

に紀徳碑（二〇七円七六銭四厘）を建立することを決めて実行した。碑の前面は漢文（西之表の漢学者平山寛蔵撰）、裏面は英文（W・L・スコット訳）で、刻字は尾形直十が行った。漢文の結びは、「善隣之道 所係非輕 我皇有訓 維民仰成 災厄相恤 孰不同情 勞微報厚見彼至誠 永受其錫 育我群英」となっている。日本語にすると、「隣人隣国と友愛を深めることとはかねて天皇陛下のお教えになるところである。人々はその教えに従ってこれら災難に陥った人々を救った。災難は相身互いであり、それを助けるのにだれが労を惜しもうか。このさやかな当たり前の行為が過分なる贈りものによってむくわれた。それは先方の誠意であり、われわれはそれを永久に記念するため、最も価値ある使い方、すなわち前途有為の若者たちの教育にこの贈りものをあてたいと思う。」という内容になっている。

以下、安城校区での使途について見ていきたい。

『太平洋にかける橋』によれば、まず、教師の質や処遇の改善では、それまで訓導一人（月給四円五〇銭、年間五四円）、助教諭二人（月給一人二円五〇銭×二人分、年間六〇円）、学校諸費六一円七〇銭、学校賦課村費が一四六円八〇銭五厘であったものを、改善後は、助教諭二人の給料・学校諸費は変わらないものの、訓導に代わり教師一人（月給一五円、年間一八〇円）を置き、さらに小使い一人（月給一円、年間一二円）を配置した。改善後、教育費は年間合計三三三円七〇銭になるが、うち

公社債利子が一二五円入るので、実質村費負担は一八八円七〇銭で、この改善により、教師の質は向上し、師範学校出やそれ相当の教師が赴任した。教育程度の高まりとともに校内の施設、生徒の訓練も改善された。

整備・充実の状況を時系列で挙げてみると、次のとおりとなる。

○明治二十三年、鹿児島師範卒の教師をスカウト、二学期より教授

○同年十一月九日、「紀徳碑」落成式挙行

○同二十四年五月、小学校の新築工事終了（一一間×七間。

凡そ七七坪）

○同二十五年二月、安城尋常小学校に昇格（修業期間四年）

○寄宿舎購入、西之表に民家一軒を買い取り、種子島中学校や実業高校、女学校に通う安城の生徒を収容。定員一

〇名。完全な自炊生活。上級生は後輩の自習を監督し、

規律などについても厳しく指導。維持管理費として生徒から一人二〇〇円を徴収（昭和三十七年）。利用者減

により寄宿舎を売却。

○昭和四十三年、市立へき地保育所建設（定員四五名、カ

シミア積立金と労力奉仕、用地は奨学会財産の四二九・五一平方メートル）、ほかに立山小学校前に土地を購入（広さ

一四八・七六平方メートル）。

三 墓地群を中心として

安城校区の墓地は集落ごとに分かれており、しかも親族ごとに一団をなしている。

平山墓地

五基（小倉／榎本）、四基（宮園）、三基（本城／宮園／山下）、二基（脇田／丸田／延時）、一基（小倉・山本／福谷／鈴木／竹之内／森／川畑／今井／大重）

上之町墓地Ⅰ

九基（榎本）、二基（落合／日高／長野）、一基（徳永／川添／遠山／長濱／上妻／新迫）

上之町墓地Ⅱ

七基（上妻）、三基（徳永）、二基（西川）、一基（宮里／永井／浜田／竹之内／遠藤／河路／長野）

下之町墓地Ⅰ

七基（小川／鮫嶋）、五基（田上）、一基（牧瀬）

下之町墓地Ⅱ

下之町墓地Ⅲ

四基（長野）、三基（上妻）、二基（林）、一基（山本／佐々木／中島／前之園）

川脇墓地

九基（川原）、二基（古田）、一基（榎元）

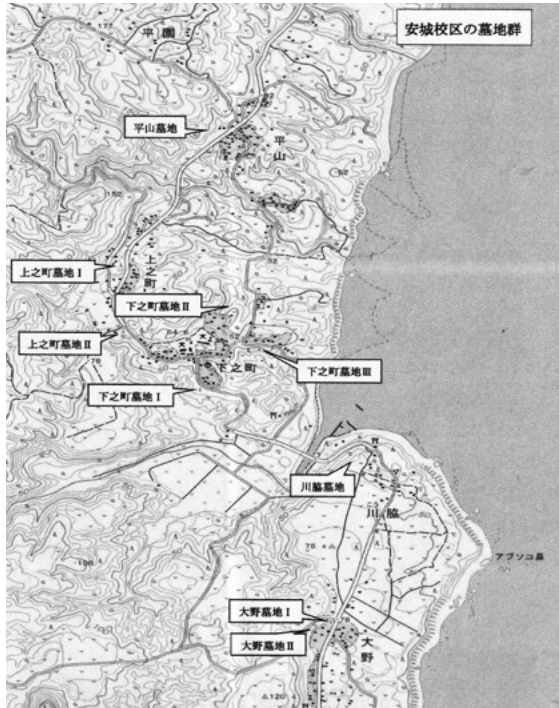


図8-20 安城校区の墓地群

大野墓地 I
 三基(森)、二基(牧瀬/松田)、一基(原田/濱田/橋口)
 大野墓地 II
 八基(山口)、二基(森/長野) 一基(鵜木/松田/福嶋/鮫嶋/江口/松下/小野/稲葉/神田/鈴木/松村/月野/上敷領)

平山墓地は、甕島からの移住者関連の墓が大部分を占めるが、同じ移住者集落であっても大野墓地には、土族(山口・長野等)と移住者関連の墓が混在している。また、上・下之町墓地には土族(榎本・徳永・上妻・長野・小川・鮫嶋・田上・牧瀬)の

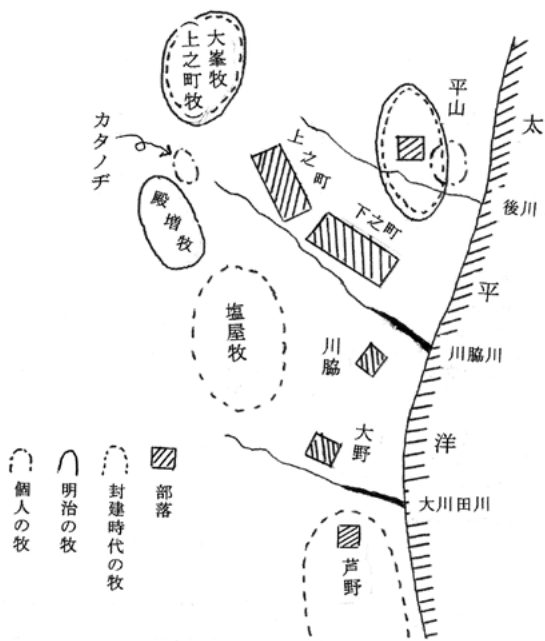


図8-21 明治時代までの牧

墓、そして川脇墓地には川原の墓(この地に昔から在住)が多く存在する。

四 牧について

塩屋牧—川脇

島内にある塩屋牧二四カ所のうちのひとつで、広さは一町歩ほど(一〇反、約九九二〇平方^尺)。馬のみを放牧し、ホイトウ(田を耕す)のときにのみ利用した。

シオヤキの祖先は南種子村の下立石(島で最初の製塩地)から直系家族(元)は九戸であった。ここから後に現和浅川へ

分かれる。なお、川脇での製塩は明治三十三年頃まで続いていた。また、島主から与えられていた塩屋牧の共有地（薪山や馬を放牧する牧地などの広い山林原野地）は、後に私有地として配分され農耕地となっている。

平山牧―平山

安田初雄氏の「近世の種子島における放牧」によれば、

「平山野 東海きり

西立切之山きり

南中之渡せ川きり

北深渡瀬之川きり

右之場所安城村中御借地ニ御免被仰付度奉願候」

右のように始まる口上竟によると、寛政年間（一七八九〜一八〇一）以前には平山にはまだ牧はなく、厩肥の生産や物の運搬に馬を使用できないばかりか、水田の植代を作るのに、ほかの村から多くの牛や馬を借りて踏代（ホイトウ）をしていた。そのため田植えの適期を逃すことが多く、御厩（役所）に牧を開設することを願い出て、その結果できたのがこの平山牧である。「安城村長野家文書」によると、平山牧は、明治に入ってから下之町集落所となり、やがて田上七之助の自牧（牛牧）になり、最終的には明治十九年に甌島から移住民が入植したことで平山集落開発の礎となっている。

大峰牧―上之町

当初は平林源助の自牧であったが、源助の不祥事により寛政年間中に二十一代種子島久芳の私牧となり、久芳没後、御牧（種子島家直営の牧）となる。当時、安城村には芦野牧と大峰牧の二つの御牧があった。卯辰の日に馬追をする習わしがあったが、通常は、まず大峰牧で馬追を実施し、翌日芦野牧で実施した。大峰牧では、当初は普通の馬を放牧していたが、牡牝馬とも鹿児島から持ち込んだ馬を入れて追々馬格も向上していった。御牧（大峰牧）は明治四年の廃藩とともに廃止され 後上之町集落の共有地となった。

殿増牧―大野

明治四年頃の公牧廃止に伴い芦野牧が閉鎖されるが、その後下之町集落の共有地となった。

カタノヂ牧

徳永氏（安城下之町）の自牧である。

五 安城小・中学校の歴史

安城小学校

「安城小学校沿革史」や『昔の安城村』によると、安城小学校の始まりは明治三年六月一日で、収容人員は旧藩士族の子弟四四人であった。そのときの学校敷地は下之町十文字で、新築

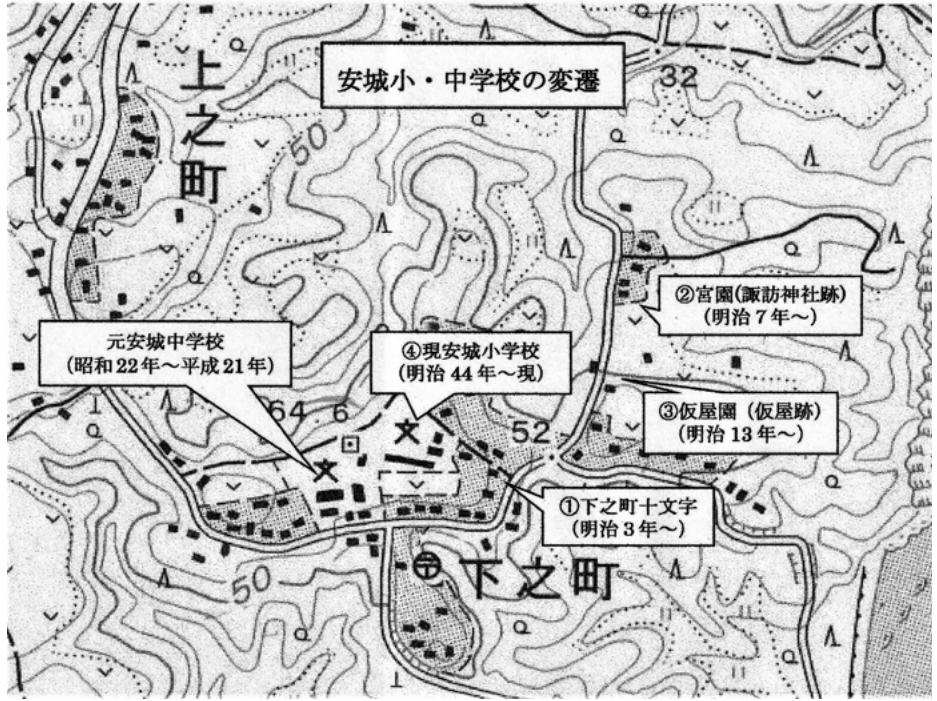


図8-22 安城小・中学校の変遷

校舎であったが、藁茅葺きで風雨を凌ぐに足るのみであったという。

以来、学校は図8-22のように、宮園(諏訪神社)、仮屋園(仮屋跡)、現在地(中目)へと場所を変えていく。

安城小学校の特色ある教育活動の一つとして伝統的に実施されている行事に「漂流びん流し」がある。この行事は、昭和十八年(一九七三)三月に卒業記念行事として始まり、昭和五十三年十月二十日からは毎年全校児童により実施されている。その目的は、「黒潮の流れ」についてその実態を調べることはもちろんのこと、漂着地の人々との交流を通して、国際的な視野を広め、世界平和へ貢献する心情を育てることにある。安城港の沖合二〇^{キロ}の海上で黒潮本流に投入しているが、これまでに北海道やアメリカ・硫黄島より北部に漂着したという報告とともに、台湾や沖縄、奄美大島など南部に漂着したという報告もあり、調査としてはとてもおもしろい結果をもたらしている。



ボトルレター35年ぶり返信 種子島→ハワイ→シンガポール (南日本新聞 平成26年10月13日)



安城中学校

安城中学校

安城中学校の沿革については、次のとおりである。

- 昭和二十二年五月二日 開校式挙行
- 昭和五十二年四月十七日 昭和五十一年度全日本学校造林コンクール中学校の部で準特選受賞

- 平成八年（一九九六）十一月三日 創立五十年記念式典挙行。「太陽の子の塔」制作
- 平成二十一年三月十五日 閉校式挙行

創立以来六二年の歩み、その間多くの輝かしい歴史（特にスポーツ面）を刻み、二二三〇人の人材を世に送り出した。

第五節 移住

甌島からの移住の経緯

甌島は、明治十六年（一八八三）の虫害、同十七・十八年の猛烈な台風により甚大な被害、大飢饉に襲われた。県令渡辺千秋は、三年かけて最困窮者約六〇〇戸を移住させることを計画し、移住事務委員会を設置した。委員長は末弘直方、受入代表は牧野篤好（種子島出張所員）であった。

なぜ種子島だったのか

- 種子島を移住先に選定したのは、次の理由が挙げられる。
- 気候温暖で土地が広い割りに人口が少ない。
- 地質が豊かでどんな作物でも栽培可能。特に黒糖生産の人手不足の解消になる。
- 砂鉄での農機具生産と製塩業への従事が可能
- 種子島住民の人情の温かさ

移住状況

『鹿児島百年（中）明治編』等によれば、移住事務所閉鎖（明治二十二年）までに全島で四三五戸が移住した。年度別に見ると明治十九年度は三一〇戸、同二十年度は一一八戸で、全体で四二八戸が移住してきている。

移民の配置方法については、島内十九村にそれぞれ移住することにし、北種子八村、中種子七村、南種子四村であった。

安城地区への移住

安城地区へ移住してきた甌島の人々は、当初安城地区の人たちの世話で「片氏」の移住長屋に住むが、環境は劣悪で、その生活は大変苦しく、やがて平山・大野へと分散・移住した。移住当初は、両地区とも食べる分の食料調達もできず大変苦しい生活を送った。安城本村（下之町）に仕事の手伝いに行き、その駄賃としてカライモや味噌・醤油・僅かな金銭（一日当たり一五銭〜二〇銭）をもらい何とか食い繋いでいる状況であった。

平 山

第一回移住は、明治十九年四月二十六日で七戸だった。翌年三月三日に二二戸が移住、合わせて二九戸となった。当時平山の地は牧場であったが、役場主導でくじを引いたりして土地の配分がなされた。しかし、土地もやせていて作物がとれず、食べる分すら十分ではなかった。そこで、生活が安定するまでは、個人個人が頼れる人を安城本村に求め、何とか食い繋いだのである。このような苦しい生活の中で、一番の心の拠り所は仏様（御影や御名号様）を拝むことであり、拝むことにより人々が団結し、日々の苦しさを乗り越えていったという。そうして、どうにか生活が楽になってきたのは大正時代になってからであった。

○移住記念碑

（表面）

明治十九年四月二十六日及同二十年三月三日ノ二回ニ渡リ此地ニ移住ス戸数合セテ二十九戸ナリ當時ノ熊毛郡長牧野篤好氏及安城區長榎本仲兵衛氏区長代理鮫島喜十次氏等指導啓発ニカメラル今生活ノ安定ヲ得ルモノ洵ニ数氏ノ深厚ナル恩恵ニ依ラズンバアラス茲ニ碑ヲ建テ其ノ徳ヲ不朽ニ傳ヘ併テ移住ノ記念ト為スモノナリ

于時 大正十二年 四月

（裏面）

第一回（移住者）

小倉良助 宮園吾八

大重休次郎 川畑新次

郎 今井早助 延時庄

兵衛 榎本三次郎

第二回

竹之内源十郎 江口善

之進 竹之内太三次

永山嘉藤次 森清左衛

門 原崎彦次郎 竹之

内笹右衛門 原崎善之

丞 山本仲助 脇田平

助 榎本源八 宮園末



平山移住記念碑（後方左 正面は移住百周年記念碑）

治 宮園治市 上野三助 小倉廣助 濱口仁次郎 中村半
 次 榎本勘次 石橋種七 丸田辰五郎 江藤虎吉 地蔵佐
 太

川口盛一 彫刻

○平山幼年団歌

昭和二年作 小倉武信作詞作曲
 一 昔を語る記念碑に きざみしるせし我が祖先
 無念の涙を流しつゝ、 八十年のその昔

神や仏のみ恵みで いしづえ築くこの里に

二 涙でかためた此の里で ふんとうすべき吾々は

荒波風に打ち勝って 朝日の如き勢いで

花を咲かせよ此の里に

三 花を咲かせた暁は 涙のこしていた人も

蓮華の上にするわりつゝ、 幸ある笑みにかえるだろう

してこそ吾等本分を つくしましたと言うべきぞ

大 野

第一回移住は明治十九年四月で、下甕村手打より七戸が移住した。その後、同年中甕村より一戸、大正十年（一九二一）川辺郡勝目村より一戸、昭和二年（一九二七）揖宿郡柳田村より一戸が移住し、計一〇戸となった。当初は、粗末な小屋を各自で作り大野の原野を開墾してカライモを作り始めた。また、山（国有林）を開き、畑を耕し続けたが、生活は一向に楽にはならなかった。そこで、安城本村へ行き手伝いをして僅かな駄賃

を頂いていた。

○移住記念碑

（裏面）

当部落は以前より僅

かの人々により農耕さ

れていたたまたま甕島

が三ヶ年に及ぶ風水害

の大災のためこの地に

八世帯移住するに至つ

た爾来八十有餘年今や

大部落として繁栄し住

民等しく平和に安んず

るはこれ全く移住者達の不撓不屈の開拓者精神のたまものである時恰も明治百年を迎へるに当り記念碑を建立し以て

永く故人の労苦をしのぶよすがとせんとする

明治十九年四月 薩摩郡下甕村手打 出身

江口カメ 松田民之助 松田次郎助 森七郎

橋口キクヨ 吉永市兵衛 森精次

同年 植村新蔵 同 中甕島 出身

大正十年 川辺郡勝目村 出身

原田与次郎

昭和二年 指宿郡 柳田村 出身

上敷領熊市



大野移住記念碑



大野の石塔（寛文四年の銘あり）

昭和四十三年秋

移住者子孫建立

撰文併著 佐藤敬順

平園

この地域は、高い崖の多い所で大きな松が何本も生えている山林であった。戦後間もない頃の昭和二十一年、平山地域の次男・三男以下の人々二〇戸と、事情あつて平山地区に身を寄せていた四戸の計二四戸がこの地に入り、山を切り開き、翌年新しい集落を作った。ちやうど平山の親集落より子集落が生まれたようなものであった。

第六節 戦争と疎開

開戦から疎開・帰島

昭和十六年（一九四一）十二月八日、真珠湾攻撃で太平洋戦争が開戦した。同二十年四月、戦争がいよいよ激化する中、種子島全島の小学校の二年生以上六年生までを対象として伊佐・大口方面へ疎開を開始した。

終戦を迎え、種子島の疎開児童は、順次帰島した。

安城小学校の疎開開始から帰島までの記録

疎開について時系列でまとめると、次のとおりである。

○四月二十八日午前七時

安城国民学校校庭に集合。その後、種子島女学校（西之表）講堂に集合

○四月二十九日午前〇時

金戸丸にて西之表港を出港。乗船者は、疎開児童一六一人・教員四人・保護婦九人・作業婦二人 計一七人

○同日午後一時

鹿児島港へ上陸し、各校別特別列車で鹿児島駅を出発。午後七時頃菱刈に到着。各家庭へ引き渡され、疎開生活が始まる

○九月二十四日午後六時頃

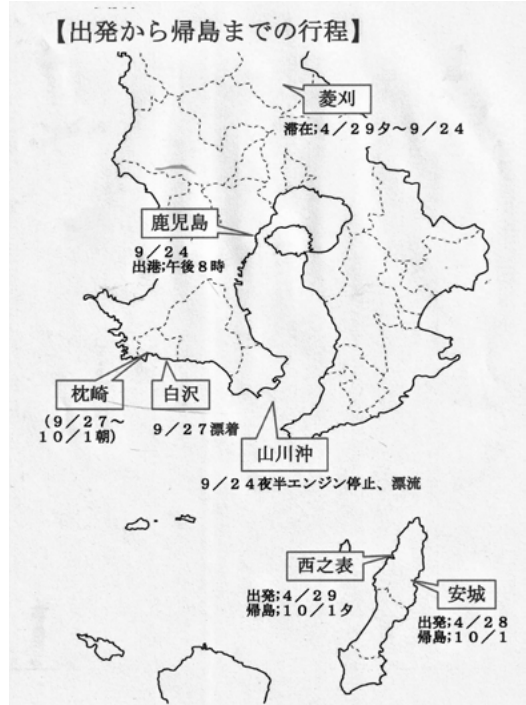


図8-23 出発から帰島までの行程

帰島のため、昌丸(約七〇ト)に乗船。乗船者は、疎開児童一五八人・教員四人・保護婦九人・作業婦二人・復員兵・一般便乗者数十名 計二一〇人ほど

○同日午後八時

鹿児島港を出港したが、夜半、山川沖でエンジンが停止し、漂流

○九月二十六日

夜半、船は開聞岳の沖を漂流

○九月二十七日

川辺郡白沢沖に漂着

○十月一日

朝枕崎港を出港し、夕方種子島に到着

疎開団は、帰路船の故障(エンジン停止)と悪天候のため三日間漂流し、四日目の午後白沢沖に漂着。白沢の人々に救助され温かい保護を受けるが、同船者のみならず家族や関係者にとつて忘れることのできない悪夢の戦争体験となった。

『戦後七〇年学童疎開記念誌 つなぐ語り継ぎたい想い』から、体験談を引用する。

救助された時には立ち上がることもできない状態で、あと少し遅かったら命はなかったと思います。白沢の海岸で「赤痢が流行っているから水は飲むな」と言われました。しかし、のどが渴いていた私は、砂浜を掘って顔を穴に突っ込むようにして水を飲みました。砂で濁った水でしたが、とてもおいしかったです。その時やっと、本当に助かったんだと思いました。私はこの遭難体験で、水一滴の大切さを強く感じました。今を生きる皆さん、どうか物を大切にしてください。そして最後に、菱刈の人々、白沢の人々、命を救ってくれた人々に心からの感謝を込め「ありがとう」。

第七節 人物

安城校区の特筆すべき人物を紹介する。以下、田上七之助・宮園豊則・上妻慎吾は、柳田桃太郎著『種子島の人』から、徳永暹・江口清淳は、井元正流著『種子島列伝』を参照した。

田上七之助

嘉永二年（一八四九）十月五日生
昭和十二年（一九三七）十二月没

安城下之町古殿の農家に生まれ、早くに両親を亡くす。七之助三六歳のとき、カシミア号事件に刺激され一念発起、商売の道へ進む。西町で呉服商を始め、帆船にて種子島から大阪まで樟脳・きくらげ・木炭・ガジュツ等を運び、大阪から衣料品・日用品を仕入れる。明治二十年（一八八七）に浜邸を購入（七五円）、同二十八年鹿兒島へ転居し、岩崎谷一角や郡元一帯の土地を購入し、宅地を造成したり植林をしたり



田上七之助翁紀徳碑

して巨万の富を得、貴族院多額納税議員選挙有権者になる。七七歳になった昭和元年に種子島に帰島。以後島の開発と社会奉仕に尽力。川端川河口埋め立てによる宅地化、田上橋架橋（現和）、安城小学校の運動場拡張のための多額の寄付と環境整備、安城平山・奥嵐・現和川氏の造林等に尽くす。また、種子島の奇獣で、天然記念物指定（昭和六年）を受け、天覧にまで浴しながら昭和二十一年に絶滅してしまった「ウシウマ」の増殖にも心血を注ぐ。純系分離を応用し絶滅寸前（雄一頭のみ生存）の牛馬から生涯二四頭もの牛馬を生産するなどその功績は実に大きなものがあつた。

宮園豊則

大正 十一年（一九二二）二月十八日生
昭和二十三年（一九四八）八月十四日没

安城平山に生まれ、幼少時代は家族とともに朝鮮で過ごしたが、敗戦により帰郷、母校の安城小学校の教職に就く。一見温厚だが、責任感が強く自己の信念はどこまでも貫徹せんとする情熱の人であつた。ことに教育に熱心で、心から子どもたちを愛し、その信条は、新教育の精神にのっとり、新時代に沿うべく、生徒自身の生活体験や自主活動を率先して取り入れ実践した。

担当する六年生が自治会で鹿兒島市への修学旅行を計画し、その資金獲得のため夏休みに稲刈り作業を実施した。作業後、



宮園豊則先生頌徳碑

危機を目撃した。まず、二人を運び三人目は死力を尽くして救助した。しかし、自身は力尽き、殉職した。昭和二十三年八月十四日午後四時、二七歳の若さであった。

この殉職は、教育愛の権化として、区民・町民はもとより県下、及び全国民へ強い感銘を与え、県教職員組合が中心となって宮園先生頌徳碑が建立されたのである。頌徳碑の末文には、「児童達よ、同志五十万教職員よ、そして文化日本建設をめざす全国民諸君、この碑のある限り、宮園先生の生涯を吾々の生涯として、正しく強く進もう。」とある。

上妻慎吾

嘉永六年（一八五三）六月 一日生
 昭和三年（一九二八）四月二十五日没
 安城下之町に一人息子として生まれ、幼少から極めて向学心

児童の強い希望により水泳練習に出かけた。沖に出て、嬉々として泳ぎ回る児童たちを見守っていたが、突然起こった潮流の変化で、三人の

が強く、医術で身を立てることを志した。明治八年、二二歳のときに鹿児島に出て、近代医学を研究するため鹿児島県の医院長で英国人のウイリアム・ウイルスに師事し内科・外科・眼科・産婦人科の西洋医学を修めた。明治十四年五月、二八歳のとき、病魔に苦しんでいる郷里の人々を助けようと郷里において開業。以来五十年近くを診療に尽くし、七五年の天寿を全うするまで無医村住民のため一生を仁術に捧げた。

徳永逞（号生萌）

明治四十二年（一九〇九）十一月十一日生
 平成 元年（一九八九）十一月 没
 安城下之町に生まれ、昭和十年、二七歳のときに朝鮮に渡って同総督府専売局技手となった。在鮮一〇年、農業技術指導を続けた後、中華民国山東省政府技術官となった。昭和十九年四月、中国済南より引き揚げ帰国し、専売公社出張所に入社した。以後西之表町議会議員、不動産取引業など務めた。また、副会



上妻慎吾之碑



徳永逞歌碑

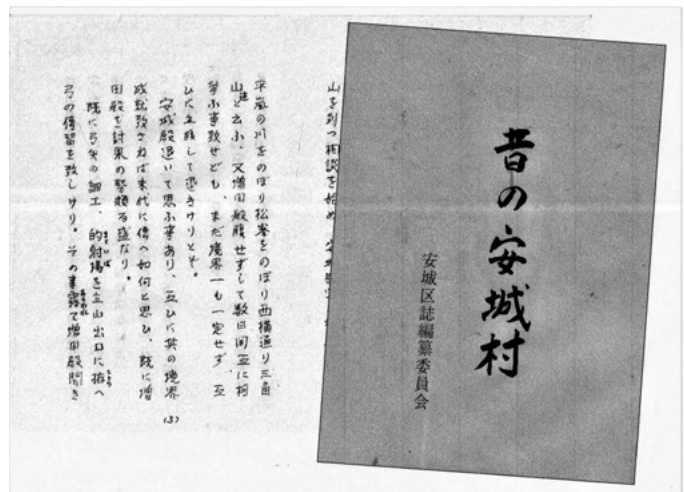
長として熊本文学会を盛り上げ地域短歌の芽を育てる一方、「南船」・「水甕」の同人、「日本歌人クラブ」会員として島の内外に活躍して文化の向上に貢献した。下之町公民館敷地内にある歌碑には、「波の花 散り飛ぶ冬の 岩かげに 祖父と釣りにき 魚欲しき日は」の歌が刻まれている。

江口清淳

大正二年（一九一三）六月 生
平成八年（一九九六）十月四日没

安城平山に生まれる。主な経歴としては、鹿児島県立第一中学校卒、一湊・中平・安城小学校に教員として勤め、教職員組合結成に奔走した。赤尾木プリント社の経営をしたり、西之表市文化財保護審議委員長、同市史編纂委員なども務めた。また執筆作業にも尽力し廃藩置県に関する多くの論文や冊子『昔の安城村』の編集、『ちくら』の発刊等にその力量を遺憾なく発揮した。なお、『ちくら』の発刊に当たってはその趣旨として「種子屋久地方の郷土史や方言、民俗等に詳しい人は多いが、別に

発表や著作が目的でない人が多く、従って調査や研究の結果は、一般には知られていない。その埋もれることをおそれ、これらの連絡発表機関として発行する。」とうたっている。



昔の安城村

第八節 年中行事

十一月
石碑祭り／市内一周駅伝参加

四月

一月

諏訪神社春季大祭／戦没者慰霊祭／安城小学校入学式／安城
小学校転入職員歓迎会

新春歩こう会

五月

三月

校区総会／校区ゲートボール大会

安城小学校卒業式／安城小学校転出教職員送別会

六月

航空防除

七月

諏訪神社・岡山神社六月灯

九月

安城小学校・校区合同運動会

十月

諏訪神社秋季大祭（願成就）／戦没者慰霊祭（西南の役）太
平洋戦争、七三柱）／市民体育祭参加



岡山神社六月灯

岡山神社関連

安姫と又四郎悲恋物語

岡山神社に祀られている兩人には、身分の違いから成就できなかった悲しい恋の物語がある。今から五百数十年前、安城地頭羽生右京の娘「安姫」は、ふとしたことから種子島を東西に二分して行く島寄



図8-24 又四郎ワタシ

せの草角力の優勝者河野又四郎と恋仲になる。又四郎は、西之表納曾の士族の生まれであつたが、安姫に会いたい一心から中種子浜津脇の魚売りとして、たびたび道なき道を踏み分けて安城にやってきた。しかし、この恋は身分の違いから許され

るものではなく、父右京の命を受けた家来榎本の手によって安姫は殺されてしまう。その場所は、現在でもあたかも安姫の血で染まったかのように川の石が赤くなっているという（血染め石の伝説）。又四郎もまた翌年五月に思い出の場所で自害する。又四郎ワタシ

『昔の安城村』によると、安姫会いたさに、又四郎が初めて踏み分けた道を又四郎ワタシと言う。口碑によると、二コースあつたと伝えられている。通常は上又四郎ワタシを通り、大雨で川を渡れないときは下又四郎ワタシを通つたという。浜津脇から安城まで約三里半の道程であつたと記されている。

下御山岡大（明）神の由来

「羽生氏家譜」に、

右京君の女子、仔細ありてやむことを得ず、榎本氏におほせて、うしなひ給いに、その後、さまざまの怪しきこと伝われば、かの河野又四郎の霊と合せて岡大神と崇め、是を下御山といふ。その後怪しきこともおさ



下御山岡大（明）神

まりけり。

という一文がある。

また、『熊毛文学』九一号には、「女子を葬りし墓地下御山は、深山の小高き地に石垣を廻らし、墓守をして墓参せしめ、鬱蒼たる雑木松樹ありし」とある。『昔の安城村』によると、「この岡大明神は明治十二年（一八七九）、安城支社と尊號を下し賜わりたり」、さらには「明治拾八年八月二十二日を以て村社の証命を下賜す」とある。

嘉助最後の角力「慈仙坊との一戦」

『西之表市の伝説』によると、後々の語り草ともなった嘉助引退角力（相撲）の時の話である。あるとき、島を二分しての東西對抗角力があつた。東の大関嘉助四八歳、西の大関慈仙坊三六歳、いずれも六尺豊かな大兵。嘉助には一つの癖があり、初めての相手との最初の一番は必ず負けて手の内を見たという。慈仙坊との初戦も、ものの見事に叩きつけられた。勝ち誇った慈仙坊が、「どうかい、嘉助。俺にはかなわんどうが。」と言うと、嘉助は「ああ、旦那よ、おいもトシじゃなあ。」と返したが、二番目が始まると、慈仙坊を左大腰で土俵の真ん中に叩きつけ、三番目も土俵の真ん中に叩きつけたという。こうして嘉助は最後の角力を飾つたのである。

また、この對抗角力の前夜、嘉助は二人の伴と岡山神社に願をかけていた。すると拝殿の戸がサーと開き、紋付きに太刀を差した大男が入ってきて、無言で三人の傍を通り抜け、本殿の

方に消えたそうである。三人は思わず無言でひれ伏すが、しばらくして嘉助が低い声でつぶやいたそうだ。「今の方こそ、河野又四郎殿だ。これで明日の勝負は決まった。」と。

田の神山

『西之表市の伝説』によると、「安城本村の字「かみうてらやま上上寺山」にあ

る、ふつう「田の神の鼻」という所。此の鼻は田の中に幾分突出している。以前はアコーの木や松があつたが、今は松だけ自然石を置いてある。文字はない。」とある。

しかし、現在は本村の字「井出下」の浦ノ田を眼下に望む高台にある。昔は、田植えや収穫の時、正月十一日には、この場所へ行ってお参りするものであつたという。



井出下の「田の神山」

源助が涙雨

安城上之町に源助という百姓がいた。寛政元年（一七八九）三月、時の島主二代久芳は、源助を足軽にとりたて、平林と

いう姓を与えた。源助は、安城の大峰牧で馬を育てていた。源助は性格が荒く乱暴で、それが理由で妻は実家に帰ってしまった。諦めきれない源助は、毎日のように妻の実家に怒鳴り込み、隣近所をよく騒がせていた。このことが殿様にも聞こえ、ついに大島に流罪となった。二年ほどして、自照院（一九代種子島久基の奥方）の四九年忌の恩赦で罪が許され、もとの大峰牧で馬の飼育に励んだ。しかし、勝気な源助は他家に負けじと、無断で領主の山の木を切り、その頃としては贅沢な美麗な家を作った。このことが城に伝わり、不屈者として今度は琉球に遠島流罪となった。このとき、大峰の牧場には、馬が二〇頭もいたが、牧場も馬も全て取り上げられ、気の強い源助も泣き泣き島流しになり、その姿は哀れなものであったという。

古来より馬追の行事は、八月末から九月上旬の卯辰の日に、芦野牧や大峰牧で行われていたが、不思議なことに、この日になれば決まって雨が降り、安城ではこの雨を「源助が涙雨」と口々に語ったと言う。

この後、大峰牧は、久芳の「私牧」となり、久芳没後は「御牧」、そして明治になって上之町集落の「共有牧」となった。

かくれ岩屋

安城の東海岸「前之浜」に「かくれ岩屋」と呼ばれる洞穴がある。ここは昔、一〇代島主種子島幡時が、後継者騒動の際、この岩屋に隠れて難を逃れたとされる場所であり、天文十二年

（一五四三）の禰寝戦争のとき、一三代島主種子島恵時が、身を隠して助かったと言われる場所でもある。



かくれ岩屋

第一〇節 史跡、神社仏閣

岡山神社

岡山神社は、実在し、輝かしい業績を挙げた人物を神として祀る（人神）神社の一つである。人物の死後三七〇年もたった明治十六年（一八八三）十月に当時の里人によって建立されたという由緒ある神社である。神社建立まで里人は、隆光山妙泰寺（明治初年に廃寺、後再建）や厨子を建立して祭祀し、その人物を崇め後世までその人徳と功績を伝えてきたという。

祭神は、安城村地頭羽生右京能房、右京の妻、右京の娘・安姫、その恋人・河野又四郎の四霊である。

岡山神社は昔から角力の神様としても知られているが、それは四霊の一人である島寄席の大関（草相撲では最高位）「河野又四郎」が祀られているからである。そのため、神社には昔から勝負事があるたびに祈願し、出軍、角力などがあるときは、ほかの村からも多くの人々が参詣したという。

また、境内には、島寄席の草相撲大関「川原嘉助之碑」と「力石」がある。嘉助は、川原嘉右衛門の長子で、天保十四年（一八四三）に安城川脇に生まれ、五八歳で没した。身の丈六尺（約一八二センチ）、一八歳で初土俵を踏み、四八歳で引退するまで、島寄せの相撲で七連勝し、在大関八回。その最後の相撲となった住吉の慈仙坊との一戦は後々までの語り草となっている。（第

九節参照）

力石は、長さ八〇センチメートル、周囲も同じくらしいの胡瓜形で、重さは二七貫五〇〇匁（約一〇三キログラム）の真石である。この石は、嘉助が一八歳の時川脇の浜から約二・五キロメートルの道を高下駄を履いたまま一度も休まずに担いできて奉納したものである。

妙泰寺（本尊 日蓮上人）

隆光山妙泰寺。本源寺末寺。草創不詳。安城下之町寺之園（現在の宮園）にあつたが、明治初年の廃仏毀釈により廃される。その後、安城の里人によって再興された。一時、小学校西

時、小学校西



川原嘉助の碑と力石



(旧) 岡山神社



妙泰寺と石塔

側の小高い所にあったが、現在の
上之町へ移転した。

元禄二年（一六八九）当時の妙
泰寺は、寺領二石、板葺社壇（一
間四面）、茅葺堂客殿（四間三間
三尺）、茅葺庫裡（三間二間三尺）
の三棟が配置されていた。

建立者については、諸説があり、
口碑によると、不幸の死を遂げた
愛娘「安姫」の霊を弔うため、右
京の妻は尼となり供養寺を建立し
たとも、右京が没したため、里人
はその徳を偲び、寺を建てて供養したともいわれる。

境内には、自然石の石塔三基（万霊供養塔）、山川石の角柱
供養塔四基が建てられている。角柱供養塔の中には、永禄六年
（二五六三）の文字が刻まれた法華供養塔がある。これは年代
の入った石塔としては島内における最古のものとされるが、
永禄六年と言えば、羽生右京没後五〇年目に当たり、その関係
性が注目される。

諏訪神社（祭神 建御名方神）

島主一〇代種子島幡時が、長野県諏訪市にある諏訪神社の御
分霊を勧請したもので、西之表西町の慈遠寺境内にあったが、



諏訪神社



川脇神社

大石（一九九六）によると、明治初年に安城下之町宮園（妙泰
寺跡地）に移し祀った。明治五年とする説もある。

その後昭和十五年（一九四〇）に現在地（鳥之峰）に遷座し
て、同五十年、現社殿に改築した。

境内や参道には、手洗石鉢や丁丑陣招魂碑、征露紀功碑、田
上翁頌徳碑などの史跡も多い。

風の神及び武勇尚武の神として信奉されている。

川脇神社（祭神 天照大神）

昔は安城港近くの小高い所に祀っていたが、戦後、現在の地
に遷座し、そのときに牧の神も合祀している。合祀以前の牧の
神は牧のそばに祀っていた。御神体はレキ岩である。



エビス神社



大野神社

元禄二年（一六八九）頃の記録には安城村に製塩地川脇ありと記されている。安城村ではここ川脇だけで製塩が行われていた。

エビス神社（祭神 エビス神）

安城漁港の山際の一段高い所に祠を二基奉祀している。向かって右の祠は、戦後漁業組合を設立したことに由来し、操業安全・漁獲豊漁祈願する場所とした。

向かって左は、この浦のエビス様として集落の中に祀っていたものを、川脇神社境内に移して祀っていたが、エビス神社を建てる際に同じ場所に移したものである。

藩政時代には川脇浦が置かれて、その区域は大字増田と大字

安城の境界より以北、大字安城と大字現和との境界門ノ鼻までとなっていた。

大野神社（祭神 豊受大神）

創建された年代不詳。大野は昔から法華宗の信徒が多かった。明治初年の廃仏毀釈の折、抛り所を廃されたため、里人の安泰と五穀豊穰を祈願して建立したのがこの神社である。

神社の祭事は法華宗の僧侶が行っていたが、現在は神官により行われている。

第二節 郷土芸能

安城大踊

いくつかの説があるが、「昔、日向國の人安城大野町に來りて住居す、その時大野の人民掛け打ち太鼓の踊りを伝習す。それより種子島中伝習す。これより掛け打ち太鼓の踊りを安城踊りと伝ふ事今に伝えしものなり。」という記録もある。現在北薩や島内各地に安城大踊が伝承されているが、元來は安城大野で踊りを学んだ人々が各地に持ち帰ったものである。しかしながら本元の安城では、継承者不足により長年踊られていない。

なぎなた踊

なぎなた踊は、その唄の内容から「団七口説き」と「おつや口説き」に大別されるが、安城のものは前者である。

女性の口上「われわれは奥州仙台坂東村の百姓弥太郎娘のみやぎとしのぶ 父の仇でまかいいずる」で始まるこの物語は、口説き（仇討ち）の話として全国各地に伝承されている。昔、百姓の娘（宮城野と信夫の姉妹）とその父が田の草を取り道の脇にその草を投げていた。すると、たまたま通りかかった志賀団七という武士の袴の裾に当たってしまう。そのため父親は子どもの目の前で手打ちになってしまう。そこで、姉妹は父の仇を討つため、武術の修行を積み、仇討ちをする。その様子を踊

りにしたのがこのなぎなた踊である。

踊りは太鼓と鉦が先導して娘がなぎなたを持ち、唄に合わせ一列に入場する。その後武士が一列で入場し、互いに口上を述べてから、娘と武士の列が入れ違いながら剣となぎなたで斬り合いの踊りをする。太鼓は娘の動作を、鉦は武士の動作を真似しながら叩き踊る。最後は、娘と武士二列で退場する。

安城では、かつて一部地域の青少年が伝承してきたが、昭和六十二年（一九八七）から小学校が授業の一環として取り組み、校区運動会や諏訪神社の秋の大祭（願成就）等で披露している。



安城有志による安城棒踊



小学生による「なぎなた踊」

第二節 年表

		和暦(西暦)	安城校区のできごと
昭和	7年(一九三二)	永仁年間 (二二九三〜九七)	初めて山を開き人家が建つ(立山)。戸数は僅かに五、六戸だった
		明応2年 (二四九三)	羽生右京能房、一二代島主忠時の命により屋久島から安城の地頭に補任される
明治	元年(二八六八)	元年(二八六八)	諏訪神社、西之表現八坂神社より安城宮園に鎮座する(五年とする説もある)
		3年(二八七〇)	六月一日、安城下之町十文字に、旧藩子弟(四四名)を収容する寺小屋を設置
		9年(二八七六)	私学校へ入校し、西南の役に加わる。安城およそ三八人。十二月二十六日出立。一人出陣し、四人戦死
		13年(二八八〇)	六月一日、安城小学校、敷地を仮屋園に移し、校舎新築工事を始める
		16年(二八八三)	十月、岡山神社建立
		18年(二八八五)	九月十五日、米国船カシミア号種子島東海にて沈没。乗務員八人安城立山に漂着し、救助する
		19年(二八八六)	四月二十六日、甕島からの第一次移住民が入植する
		23年(二八九〇)	一月、安城小学校校内にカシミア号関連「紀徳碑」を建立
		42年(一九〇九)	上之町岡山神社を北山に移し、南山の神社(岡山大明神)を合祀、拝殿を新築する
		種子島のウシウマ、国の天然記念物として指定される	

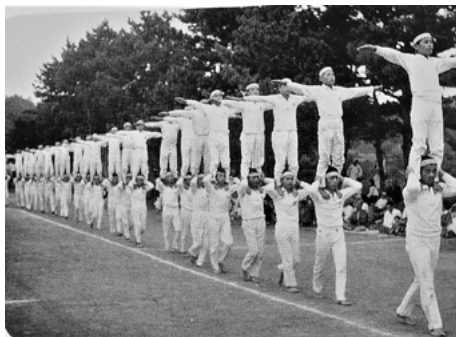
		和暦(西暦)	安城校区のできごと
平成	9年(一九九七)	15年(一九四〇)	諏訪神社を現在地(鳥之峰)に遷座
		20年(一九四五)	四月二十八日、安城小学校児童(二〜六年生全員)疎開先(菱刈町)に向け西之表港を出港
		21年(二〇〇九)	九月二十四日、疎開児童含む一行二百余人、昌丸にて鹿児島港を出港し、漂流する
		22年(一九四七)	十月一日、疎開児童帰島する
		23年(一九四八)	五月二日、安城中学校開校
		25年(一九五〇)	平山地域の長男以外の人たち含む二四戸が平園に入植・開拓
		45年(一九七〇)	八月十四日、宮園豊則先生殉職
			種子島のウシウマ(国の天然記念物)絶滅
			四月一日、安城校区に初の市立へき地保育所完成(定員四五名、カシミア積立金と労力奉仕)
			三月十日、大野林道舗装工事開始
	十月二十九日、岡山神社落成式挙行		
	三月四日、カシミア橋開通式(安城大野と立山間)		
	八月四日、平山地区に「種子七橋」(たねしちばし)が開通。幅七 ^{メートル} 、長さ七四 ^{メートル}		
	三月十五日、安城中学校開校式挙行		
	三月二十六日、安城保育園閉園式		



安城中学校第1回卒業生（昭和22年度）



小学校卒業記念（大正3年）



安城中学校「男子の雄姿」



安城中学校テニス県大会団体・個人優勝（昭和43年）



安城小学校の漂流ビン流し（昭和53年）
写真集『種子島・屋久島の100年』より



懐かしの郵便局



業間体育（後ろの建物は小学校）